

明日 への 話題

「貿易立国」 という通念



国際金融情報センター
理事長

たまき りんたろう
玉木 林太郎

小学校の社会科で刷り込まれた言葉の一つに「貿易立国」がある。日本は人口が多いが国土が狭く資源にも恵まれないので、輸入した資源を国内で製品にして輸出する「加工貿易」が日本の生きる道である、と教わった。繊維製品や鉄鋼・自動車などの輸出が経済成長の牽引役であると（私を含め）多くの人が信じ、海外市場にあふれる日本製品の映像とGDPの数字が結びついていた。

しかし数字を見るとかなり怪しい。1956年から72年までの高度成長期の平均成長率は9.3%だが、財・サービスの純輸出の寄与はマイナス（-0.2%）である。高度成長は個人消費（寄与度5.5%）や民間設備投資（同1.6%）を中心に内需の拡大によるもので、むしろ景気拡大による輸入増が「国際収支の天井」として成長の制約要因だったことは知られている。息子の使っていた米国の小学校の社会科教科書に「米国は貿易の割合が低い経済で、このような国は他に日本とブラジルがある」と書かれていたのは今でもその通りで、日本は経済規模に比べて輸出・輸入の割合の最も低いグループに属する。

日本は貿易で稼ぐんだという「思い込み」がなぜ生じたのだろうか？ 輸出企業は大企業が多く、その業績と株式市場が連動し政策や報道への影響力も強かったからか。あるいは敗戦後の国民が外国での自国製品の評価の高まりを自らに重ねようとしたからか。理由はいろいろ考えられるだろうが、「貿易立国」意識が一般の人々に国際収支や為替相場への強い関心を植え付けたことは間違いない。それも国際収支は黒字が良い、為替は円安が良い、という一方向に。2013年当時海外に住んでいた私は久しぶりに東京を訪ね、進行する円安が社会の雰囲気を変えて大いに明るくしていたのに驚いた。ガソリン代が上がって困るであろうタクシー・ドライバーまで円安を歓迎している。理由を聞くと、円高が不景気の原因だったからこれ（円安）でお客が増えるに違いないからという。こんな国他にあるかな？

このところまた為替の議論が目につく。どうも今度は流れが変わって円安を問題視している。為替相場が激しく変動することは極めて好ましくないが、円安であれ円高であれ得する人と損する人の両方がいる。為替（円安）への強すぎる意識が新たな「思い込み」を生まないように。我々が直面する大きな課題は他にたくさんあるのだから。